

グローバル教養学部

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】(参考)

グローバル教養学部では、「広いリベラルアーツと少人数教育が実現しやすく」することを目指して、2020年度4月からの新カリキュラムを導入したことは高く評価できる。今後各種学生アンケートや学生の成績等にて、その有効性を注視していくことが望まれる。

これ以外にも、貴学部では、様々な具体的な課題を発見し、それらを解決するために、入試改革や学部に対応しい学習成果の公表など、多く達成指標や具体的な目標を達成したことは高く評価できる。また、貴学部の年度目標と達成指標は比較的具体的であり、学部として適切かつ誠実な自己点検作業を行っているとして評価できる。

一方で、年度末報告における教授会執行部と質保証委員会の(学部内での)点検・評価においてより率直な意見交換が望まれる点や、一部の「年度目標」と「達成指標」でうまく合っていない箇所もあるため、一層の検討をお願いしたい。

貴学部は全ての授業を英語で行うという国際性を志向した学部であり、志願者の偏差値をみてもそのことは対外的に高く評価されていることがわかる。その一方で、世間一般の認識では、貴学部における「リベラルアーツ」と「学際性」の違いや、「リベラルアーツ」と「専門教育」の概念の捉え方も分かりにくいことも確かである。学部としての Mission のさらなる具体化・明確化とその対外的な発信を期待したい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

新カリキュラムの有効性については、学生の履修状況や成績を執行部でモニタリングする他、学生モニター制度や学部独自のアンケート調査で学生の声を聞き、FDワークショップで兼任教員の声を聞くことに務めている。新カリキュラムの教育効果や問題点に関しては、導入年度からオンライン授業実施となったこともあり、正確な評価が難しく、2021年度も引き続き注視していく予定である。

教授会執行部と質保証委員会の意見交換は、年度末報告の際に改めて議論する点が少なかったが、質保証委員会との意見交換は教授会場で年間を通して随時行っていることから、十分になされているものと考えている。なお、2020年度末には、質保証委員からは次年度に向けて学部として取り組むべき課題をご指摘いただいているので、2021年度はそれらを考慮に入れた年度目標と、それに合致した達成指標を設けていく。

「リベラルアーツ」と「学際性」、さらに「専門教育」との関係性が周知されていないという点に関しては、2020年度中には対策が取れなかったため、2021年度に学部内のPR委員会とカリキュラム委員会にて対策を検討する。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

グローバル教養学部は、2020年度に導入した新カリキュラムの有効性に関して、執行部によるモニタリング、学生モニターやアンケートの活用、兼任教員を含むFDワークショップの開催などによって、適切に検証する体制を整えていることは、高く評価できる。アフター(ポスト)コロナに向けて、オンライン授業の利点の有効活用などを含めての新カリキュラム検証を、引き続き綿密に行うことを望みたい。

執行部と質保証委員会の意見交換も随時行われており、質保証委員会から2020年度末に示された提言も具体的で射たものであるといえるため、その達成に尽力していただきたい。

「リベラルアーツ」と「学際性」、また「専門性」の関係性については、その内容をより明確にしたうえで学部内での共有を行うとともに、その周知については学部内PR委員会とカリキュラム委員会の検討と実施に期待したい。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

2020年4月にスタートした新カリキュラムでは、全ての科目がカリキュラムポリシーにある「リベラルアーツ教育」「学際教育と専門性」「少人数教

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

育」「ダイバーシティ教育」「学術英語教育」の複数項目に該当し、全ての項目に該当する科目も多い。カリキュラムの根幹には 30 以上の学問分野にわたり 200 以上の科目を置き、1-3 年次を通して「人文学系 (Humanities)」「社会科学系 (Social Sciences)」「経営科学系 (Management Sciences)」の三つの領域における学際性と専門性を習得できるようになっている。リベラルアーツ教育を通し、柔軟な思考と批判的な思考 (critical mindset) が育成され、全ての授業を英語で提供しているため学術的な英語運用能力も向上するようになっている。文化・言語・民族・社会的階級・性別などの多様性については、授業内で学ぶだけでなく、GIS の教員・学生が多様なバックグラウンドをもっていることから、その交流の中でもダイバーシティ教育がなされている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページ URL や掲載冊子名称等

- ・ GIS Curriculum Map: (<https://www.hosei.ac.jp/gis/shokai/>)
- ・ GIS Curriculum Tree:
(https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf)
- 学部一 (9)
- ・ 2020 年度 GIS 履修の手引き
(https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf)
- ・ GIS Syllabus 2020 (<https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AR>)
- ・ GIS ウェブサイトの Curriculum ページ (<http://gis.hosei.ac.jp/cms/?courses=curriculum>)
- ・ カリキュラム・ポリシー (https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/kyoiku_katei/gakubu/)

② 学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

S A B

※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修 (個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ (必修・選択等) 含む) への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

- ・ 初年度教育として英語スキル科目 (Academic Skills Subjects) を設け、入学時の英語運用能力別に学生のクラス分けを行い、1-2 クラスは 4 単位、クラス 3-6 は 6 単位、クラス 7-8 は 10 単位を必修としている。入学時は入試経路によって英語運用能力のばらつきがあるものの、初年度教育終了時には英語運用能力の差がほぼ解消されるようにしている。また、選択制の英語スキル科目 (Debate and Discussion, English Test Preparation for TOEFL, Professional Communication など) や、各種スキル科目 (Value-added courses ; Chinese, Spanish, French, Information Technology など) を設け、大学での学びに役立つ能力を伸ばすための科目を設置している。
- ・ カリキュラム根幹にある科目は 100 番台 (入門科目)、200 番台 (中級科目)、300 番台 (上級科目)、400 番台 (ゼミ・演習) までのレベルに分けられている。また、「人文学系 (Humanities)」「社会科学系 (Social Sciences)」「経営科学系 (Management Sciences)」の三つの領域にも分類されており、順次性と体系性を確保している。
- ・ 100 番台の入門科目には、上記の 3 領域それぞれにつき 6 単位以上の履修を必修としており、全領域を網羅した履修を課すことで、リベラルアーツの基盤を作っている。
- ・ 200 番台から 400 番台の科目には、事前の修得が必須の科目 (Prerequisites) や、修得が望ましい科目 (strongly recommended courses) をシラバスで明記している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ GIS Curriculum Map: (<https://www.hosei.ac.jp/gis/shokai/>)
- ・ GIS Curriculum Tree:
(https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf)
- 学部一 (9)
- ・ 2020 年度 GIS 履修の手引き
(https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf)
- ・ GIS Syllabus 2020 (<https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AR>)
- ・ GIS ウェブサイトの Curriculum ページ (<http://gis.hosei.ac.jp/cms/?courses=curriculum>)
- ・ カリキュラム・ポリシー (https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/kyoiku_katei/gakubu/)

③ 幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S A B

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<p>※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・GIS のカリキュラムはリベラルアーツ教育により、幅広い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するために組まれている。 ・全ての科目において、少人数クラスでの双方向型アクティブラーニングを実施しており、ディスカッション・プレゼンテーション・リアクションペーパーなどを通して総合的な判断力を伸ばしている。 ・学生はプロジェクトやプレゼンテーションを通して、多様性を尊重しつつ、チームワークやリーダーシップスキルを身につけている。 ・GIS コミュニティーは多様なバックグラウンドをもつ教員・学生からなるため、その交流を通し、ダイバーシティに対する意識を高めている。 ・学部独自の留学制度 (Overseas Academic Study Program) を設けており、留学を通して幅広い教養と豊かな人間性を身につける機会がある (ただし 2020 年度はコロナ感染により中止となった)。 		
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>		
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・GIS Curriculum Map: (https://www.hosei.ac.jp/gis/shokai/) ・GIS Curriculum Tree: (https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf) 学部 - (9) ・2020 年度 GIS 履修の手引き (https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf) ・GIS Syllabus 2020 (https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AR) ・GIS ウェブサイトの Curriculum ページ (http://gis.hosei.ac.jp/cms/?courses=curriculum) ・カリキュラム・ポリシー (https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/kyoiku_katei/gakubu/) ・OAS 資料 (https://www.hosei.ac.jp/gis/ryugaku/dokuji/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54) 		
④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。	S	A B
<p>※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初年次教育は上記 1.1②にあるように、入学時の英語運用能力に合わせた英語スキル科目 (Reading Skills, Writing Skills) を必修とし、初年度教育終了時 (1 年目の終わり) には英語運用能力の差がほぼなくなるようにしている。 ・リスニングとスピーキング・スキルに関しては、通常の授業に参加するだけで向上が見られるが、特にスキルアップを希望する学生向けに、Debate and Discussion, Presentation and Public Speaking などの選択科目を設置している。 ・100 番台の入門科目では、領域ごとに 6 単位以上の履修を必修とし、2 年次以降に幅広いリベラルアーツ教育を実現するとともに、より専門性の高い科目の履修が履修できるようにしている。 ・高大連携に関しては、法政国際高校にて高大連携講座「大学の学問にふれる」にて 2020 年 6 月 19 日に Diana Khor 先生が「Gender Studies」と題した講演を行った。また、2020 年 10 月 4 日には学部独自にオンライン模擬授業 (Mark Birtles 先生担当) をライブ配信し、25 名の高校生が参加した。 ・学部のウェブサイトには、上記の模擬授業の録画動画を掲載し、受験生などが随時視聴できるようにしている。学部ウェブサイトにはその他にも、7 月上旬から 4 名の専任教員の授業動画、および 10 名の専任教員の授業と研究の紹介動画を掲載している。 		
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>高大連携に関しては、新たに以下を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年 10 月 4 日には「The Changing Boundaries of Copyright in our Digital World」と題する模擬授業 (担当教員: Mark Birtles 先生) をライブ配信し、その様子を録画した動画を GIS のウェブサイトに掲載した。 ・オープンキャンパスに先立ち、GIS のウェブサイトにて 4 名の専任教員の授業動画を公開し、誰もが視聴できるようにした。具体的には Stevie Suan 先生による「Manga Studies」、Diana Khor 先生による「Introduction to Sociology」、John Melvin 先生による「Introduction to Tourism Studies」、Mark Birtles 先生による「Digital Writing and Publication」がある。 ・10 名の専任教員が各自 2~5 分で専門分野と担当授業の紹介動画を作成し、7 月上旬以降 GIS のウェブサイトから視聴できるようにしている。各動画とも 200 回以上の閲覧記録がある。 		
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・GIS Curriculum Map: (https://www.hosei.ac.jp/gis/shokai/) 		

- ・GIS Curriculum Tree:
(https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf)
学部－ (9)
- ・2020年度GIS履修の手引き
(https://www.hosei.ac.jp/application/shibboleth_general/1515/8805/3859/2020_GIS_handbook_web20200428.pdf)
- ・GIS Syllabus 2020 (<https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AR>)
- ・GIS ウェブサイトのCurriculum ページ (<http://gis.hosei.ac.jp/cms/?courses=curriculum>)
- ・カリキュラム・ポリシー (https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/kyoiku_katei/gakubu/)
- ・国際高校の高大連携講座の報告資料
- ・<https://www.youtube.com/watch?v=f1GB4GvEM7s>
- ・<https://www.youtube.com/channel/UCTPJXY1mV0gV0AoFOI16u0A>

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

- ・ディプロマポリシーに「地球全体が対処すべき諸問題について、深い教養と最先端の議論に精通し、それらを現実社会に応用できること」「民族や言語、価値観や社会制度を異にする国家・地域・コミュニティーに関する正確かつリアルタイムの知識。また、それぞれの固有文化の意義を尊重する姿勢があること」「相手の論点を的確に理解し、議論に積極的に関わることのできる高度な英語運用力を備えていること」と記されているように、国際性の涵養はGISのカリキュラムの根幹である。
- ・学部独自の留学制度 Overseas Academic Study Program (OAS)が設置されている。2020年度は5名の希望者がいたが、コロナ感染拡大防止のため中止となった。
- ・2020年度には11名(春学期1名, 秋学期10名)の派遣留学が決定していたが、コロナ感染拡大の影響で渡航できなくなり、全員が辞退することとなった。2021年度の派遣留学には12名(春学期1名, 秋学期11名)が決定している(ただし1名がすでに辞退)。
- ・国際ボランティア, 国際インターンシップ, 短期語学研修も単位認定の対象となっており, 2020年度は春学期に2名が短期語学研修に, 1名が国際ボランティアにオンラインで参加した。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2020年度GIS履修の手引き
- ・OASパンフレット
- ・OASプログラム希望登録者一覧(2020年度秋学期出発)
- ・大学案内
- ・2020年度第7回教授会議事録, 資料D-2, 第9回教授会議事録, 資料D-6, 7, 第11回教授会議事録, 資料D-14, 第13回教授会議事録, 資料D-9

⑥学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

- ・キャリア教育に関しては、International Business and Employability, Introduction to Business, Professional Communicationを設置している他、従来通り、総合科目として、Introduction to Career Design, Career Design Advancedの乗り入れ科目を維持している。
- ・2020年度の秋学期にキャリアセンターの職員によるオンライン「ゼミ出張ガイダンス」を全てのゼミで実施した。
- ・キャリア支援委員として2名の専任教員が随時学生のサポートを行っている。各業界で内定を得ている上級生が就職の体験談を語るGIS Career Forumを2020年10月27日と11月27日にオンラインで実施し14名と30名の在学生在が参加した。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・GIS Syllabus 2020
- ・GIS Syllabus 2021
- ・GIS Career Forumの報告は2020年度第10回, 第11回教授会議事録

1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【履修指導の体制及び方法】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己学習支援委員による個別面談（成績の低下や獲得単位数の少ない者に対して毎学期実施。2020年度春学期は7月6日、10日、13日、15日、29日に5名に対して、秋学期は11月9日、10日、16日に3名に対して実施した） 秋入学生のためのガイダンス（2020年9月12日ハイフレックスで開催） 新2年生のためのガイダンス（2021年3月30日対面で開催）ゼミ履修に関する質問や履修希望者が超過した場合に行うセレクションに関する質問に対して、上級生や専任教員が説明をした。 在学生のための学部ガイダンス（2021年4月17日電子掲示板にて告示） 新入生のための学部ガイダンス（2021年4月1日動画のメール配信） 教員による新入生オリエンテーション（2021年4月1日対面で開催） 教員による新入生個人面談（2021年4月3日開催、専任教員3名が15名の相談に対応した） 	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己学習支援委員による個別面談の報告（2020年第6回教授会資料C-3、第7回教授会資料C-8、第10回教授会資料C-5） 秋入学生のためのガイダンス（2020年第8回教授会議事録） 新2年生のためのガイダンス（2021年第1回教授会議事録） 新入生のための学部ガイダンス（https://www.hosei.ac.jp/gis/zaigakusei/information/2021spring/） 教員による新入生オリエンテーション（2021年第1回教授会議事録） 教員による新入生個人面談の報告（2021年第2回教授会議事録） 	
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>2020年度は春・秋学期ともにオンライン授業がメインであり、対面授業に比べ学生の学習状況や理解度が見えにくかったことから、各教員が課題やアンケートなどを用いて学生の理解の把握に努めた。課題に対するフィードバックを通して学習指導を行った他、メールやZoomのチャットボックスからの質問にも細やかに対応した。成績不振や履修単位の少ない学生に対しては毎学期、自己学習支援委員が個別に面談をし、学習指導を行っている。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 専任・兼任教員対象のFDワークショップ（春7回：4/21、4/22、4/23、5/13、5/20、7/3、7/8；秋3回：9/11、9/14、11/18）2020年第1回、第4回、第6回、第7回、第8回、第10回教授会議事録 教員と学生アンケートのフィードバック（2020年第7回教授会議事録） 自己学習支援委員による個別面談の報告（2020年第6回教授会資料C-3、第7回教授会資料C-8、第10回教授会資料C-5） 	
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>GISの全ての授業でアクティブラーニングを取り入れており、ほとんどの科目がプレゼンテーションやディスカッション、グループ・プロジェクトなどを課している。これらを行うには事前にリーディングを行い、スライドを作成するなどの準備が必須となっている。ディスカッションへのアクティブな参加やプレゼンテーションは多くの授業で成績評価の基準となっているため、自宅での学習は必須であるという認識が学生の間でも定着している。各授業のシラバスには、2単位の授業では週4時間の予習・復習の時間が必要であると明記しており、教員による新入生オリエンテーションでも、各授業につき最低4時間の自宅学習が必要であることを説明している。2020年度秋学期の学生による授業評価アンケートでは、学生の28%が週1時間以上2時間未満、23%が週2時間以上3時間未満、18%が週3時間以上授業外で学習していると回答し、合計で70%が週1時間以上は学習していることが確認できている。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> GIS Syllabus 2021 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・2020年度秋学期「学生による授業改善アンケート<期末>」の結果

④教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S A B

【具体的な科目名及び授業形態・内容等】 ※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

2020年度は97%、2021年度は98%の科目でアクティブラーニングを実施している。ただし、シラバスにて「アクティブラーニングの有無」を記載する欄にチェックがない科目の中には、外国語の授業やITの授業が含まれることから、実態はほぼ100%と言える。2020年度はさらにコロナ感染の影響により、双方向型オンライン授業やオンデマンド授業も新規に行った。オンライン授業でも少人数での双方向型授業を維持すべく、専任・兼任教員を対象にしたFDワークショップを春学期7回（4/21, 4/22, 4/23, 5/13, 5/20, 7/3, 7/8）、秋学期3回（9/11, 9/14, 11/18）開催し、授業での工夫について意見交換を行った。また、2020年5月末に学生と教員に対してアンケート調査を行い、オンライン授業の学習効果について尋ね、その結果を学生と教員にフィードバックし、授業の質の向上につなげた。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

オンライン授業を余儀なくされたものの、学部内でFDワークショップを度々開催し、専任・兼任教員共に意見を出し合うことで、GISの教育の根幹であるアクティブラーニングを維持することができた。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ GIS Syllabus 2020
- ・ GIS Syllabus 2021
- ・ FDワークショップ開催報告（2020年第1回、第4回、第6回、第7回、第8回、第10回教授会議事録）
- ・ Letters to instructors（8/3, 9/18配布、第8回教授会議事録）
- ・ Report on GIS student survey（2021年第7回教授会議事録）

⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S A B

※どのような配慮が行われているかを記入。

GISは少人数教育をカリキュラムポリシーで明文化していることもあり、各授業の履修者数の上限を36名に定めている。2020年春学期の平均履修者数は24.1人、秋学期は20.6人。2020年春学期には、オンライン授業であっても履修者数を制限するよう専任・兼任教員に伝達したものの、履修者数を超過する授業が複数出てしまったため、秋学期には履修者数に関する周知をより徹底した。授業初日に定員を超過した授業では選抜（セレクション）を行い、3日以内に選抜結果をGoogle Formにて事務室に報告し、学生はその結果を随時オンラインで確認できるようにしている。選抜に漏れてしまった学生は、その情報をもとに空きのある授業を見つけることができるようになった。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ Teaching in GIS（兼任講師全員に配布・送付している学部作成のパンフレット）
- ・ セレクションの結果 <https://hosei.study.jp/gis/class/selection2020sp/>（春学期）
- ・ <https://hosei.study.jp/gis/class/gis-selection-2020-fall/>（秋学期）
- ・ 2020年春学期受講者数エクセル表
- ・ 2020年秋学期受講者数エクセル表

⑥通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。

※取り組みの概要を記入。

オンライン授業であっても、教育内容は変更していない。教育方法に関しては、双方向型のアクティブラーニングを可能とするために、2020年度は専任・兼任教員合同でFDワークショップを頻繁に実施し、授業方法についてのアイデアを共有した。また、2020年5月末には教員・学生双方を対象にアンケート調査を行い、オンライン授業での困りごとや良かったことについて尋ね、その結果を教員と学生にフィードバックした。これらの情報は、各学期の始まる前（8月3日、9月18日、3月22日）に全教員に送付した。2021年3月23日には兼任教員との懇談会を開催し、対面およびハイフレックスにて授業運営の方法などについて説明をした。

オンライン授業に関しては、具体的には以下のような対策をとっている。

- ・ オンライン授業ではZoomのBreakout room機能を活用し、通常の授業で行うようなグループ・ディスカッションの機会を取り入れる。
- ・ オンライン授業であっても、できるだけ授業時間内にリアルタイムで教員に質問をしたり、ディスカッションができる時間をとる。また、学生同士が共同で行う作業（グループ・ワーク、グループ・プレゼンテーションなど）をできるだけ取り入れる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・課題、アンケート、呼びかけなどで必ず毎回出席を確認する。
- ・メール、Hoppii の掲示板、Zoom のチャット機能などを利用し、学生からの質問を受け付ける。また返信までのおおよその時間（例えば平日は週 2 回など）を事前に学生に伝える。
- ・課題やレポートに関しては、システムの不具合などで締め切りに間に合わないことが考えられるので、提出方法を事前に複数指定する、締め切り後の提出にも柔軟に対応する。
- ・課題やオンラインでの試験では、外部資料を参照しないことの誓約書を提出させたり、外部資料を参照しただけでは回答できないような問題を作成する。
- ・2020 年度秋学期期末「学生による授業改善アンケート」では、対面授業の時と同等に十分な教育効果があることを確認した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・Guidelines for effective online teaching (8 月 3 日, 9 月 18 日配信資料)
- ・Teaching in GIS (3 月 22 日配信資料)
- ・Report on GIS instructor survey (2021 年第 7 回教授会議事録)
- ・Report on GIS student survey (2021 年第 7 回教授会議事録)
- ・2020 年度秋学期期末「学生による授業改善アンケート」の集計結果 (2020 年度第 14 回教授会議事録、資料 1-1)

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S A B

【確認体制及び方法】 ※箇条書きで記入。

- ・全学部の成績分布表
- ・成績調査申請制度
- ・OAS 委員会、派遣/認定留学単位認定作業委員による本学の評価基準に基づく審査

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2020 年度春学期 GPCA 集計表 (2020 年度第 11 回教授会議事録、第 13 回学部長会議メモ)
- ・2020 年度秋学期期末「学生による授業改善アンケート」の集計結果 (2020 年度第 14 回教授会議事録、資料 1-1)
- ・採点訂正申請書 (2020 年度 10 回教授会議事録、資料 C-14)
- ・派遣/認定留学単位認定 (2020 年第 1 回教授会議事録、資料 D-3, 第 2 回教授会議事録、資料 D-5, 第 3 回教授会議事録、資料 D-3, 第 4 回教授会議事録、資料 D-4, 第 5 回教授会議事録、資料 D-1, 第 6 回教授会議事録、資料 D-1, 第 7 回教授会議事録、資料 D-3, 第 8 回教授会議事録、資料 D-6, 第 12 回教授会議事録、資料 D-10)

②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

シラバスの第三者チェックを行う際に、成績評価の基準について確認している。一つの基準が占める割合が高い場合（たとえば期末試験が成績の 50%以上である場合など）は、執行部から基準をより細分化するよう求めている。兼任教員には、担当の専任教員（コーディネーター）を割り当て、成績評価に関する相談ができる体制をとっている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・GIS Syllabus 2020
- ・GIS Syllabus 2021
- ・2020 年度コーディネーター一覧表

③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい いいえ

※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。

キャリアセンターから卒業生の進路に関するデータの提供を受け、毎年の動向を把握している。2020 年度はコロナ対応に追われ申請ができなかったが、2021 年度は申請し、5 月末日にデータの提供を受ける予定である。また、学位交付時に行う卒業生アンケートから進路に関するデータを受けている。2020 年度は郵送で実施。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・卒業生アンケート
- ・卒業生データ提供申請書

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい いいえ

<p>※データの把握主体・把握方法・データの種類等を記入。</p> <p>執行部とカリキュラム委員会で検証した上で、教授会で全教員に周知している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・進級・卒業判定名簿（2020年第6回教授会資料D-2，第8回教授会資料D-10，第13回教授会資料D-12）</p>	
<p>②「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。</p>	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>アセスメント・ポリシーにおいて、各学年の学習成果を測定するための指標を明文化し、これに基づいた成績評価が適切に行われるかをシラバスの第三者チェックで確認している。成績評価は期末試験だけでなく、随時行われる小テストやレポート、口頭発表、授業への貢献度なども考慮するよう、兼任講師を含む全教員に依頼している。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・GIS アセスメント・ポリシー (https://www.hosei.ac.jp/gis/shokai/policy/assessment/)</p> <p>・GIS Syllabus 2020</p> <p>・GIS Syllabus 2021</p> <p>・Teaching in GIS</p>	
<p>③「学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。</p>	<input type="checkbox"/> S A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p> <p>大学評価室が行っている保護者アンケート、1年生アンケート、卒業生アンケートなどの調査結果から、ディプロマポリシーに掲げている「問題発見・解決能力」、「学術知識の応用力」、「異文化・多文化の理解」、「英語コミュニケーション能力」が身についたと評価している回答者の割合を毎年確認している。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2020年度には上記に加え、2011年から2020年までの各種アンケートデータを統合し、経年変化についても確認した。また、学生は入学時と一年次終了時にTOEFL_ITPを受けているが、これまでは単年度のスコアしか吟味されていなかったもので、2020年度は2017年入学者から2019年データ入学者分のスコアを統合した上で分析し、各年度の初年度教育の効果、とりわけ英語運用能力の向上について確認した。入試経路により入学時は英語運用能力に多少のばらつきが見られるものの、1年終了時には全員の英語運用能力が向上していること、さらにはスコアの低い学生ほど英語運用能力が著しく伸びていることが分かり、英語運用能力の分散が小さくなることが確認できた。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2020年度第4回教授会議事録、第8回教授会議事録、資料C-9</p> <p>・2011年から2020年1年生アンケートと卒業生アンケートの分析結果</p> <p>・入試経路別GPAと英語運用能力の分析結果（第14回教授会議事録、資料C-10）</p>	
<p>④学習成果を可視化していますか。</p>	<input type="checkbox"/> S A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等。</p> <p>上記③の分析結果を教授会で報告した。また、一年次の英語運用能力の向上に関しては、保護者向けの動画の中で紹介し、GISのウェブページで公開した。また、英語運用能力に不安を感じている新入生にも分析結果を紹介した。引き続き、オープンキャンパス等の学部紹介などでも紹介していく。ゼミでの学習成果は、各教員がホームページで公開したり、研究発表会に外部の参加者や卒業生を招待するなど、可視化の工夫をしてきた。</p>	
<p>【2020年に変更や改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>2020年度には各ゼミの卒業論文をGISウェブサイト上で公開することの是非について教授会にて議論し、論文の題名のみ公開することで合意した。一年次の英語運用能力向上に関しても、3年分のデータを統合し、分析することで明確な学習成果を評価することができた。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・2020年度第14回教授会議事録</p> <p>・保護者向け動画ビデオ (https://www.hosei.ac.jp/gis/info/article-20210405142613/)</p>	
<p>1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。</p>	
<p>①「学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に</p>	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>向けた取り組みを行っていますか。</p>	
<p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学生の平均履修単位数、平均修得単位数、GPA を Curriculum & FD 委員会と教授会で確認している。1-2 年生に関しては TOEFL ITP を実施し、英語運用力の向上が見られたかを確認している（ただし 2020 年はコロナ禍のため中止）。 ・大学評価室による各種アンケート調査、卒業後の進路調査の結果を教授会で共有している。 ・学生モニター制度（2020 年 12 月 9 日実施）や Chat with the Dean（2020 年 5 月 6 日開催）などを通して教育課程や学習成果に関する学生の意見を聞き、教授会で共有している。 ・教員による相互授業参観を実施し、教育課程の内容や方法の適切性について、担当教員にフィードバックし、教授会でもその内容を共有することで教育内容と方法の改善につなげている。 ・春学期と秋学期にはそれぞれ学生の GPA や履修単位数を確認し、成績不振者を特定して自己学習支援委員による個別面談などを行っている。 	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年度第 11 回教授会議事録 ・学生モニター会議録（2020 年 12 月 9 日実施）、2020 年第 12 回教授会資料 D-8 ・Chat with the Dean の案内文 	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B</p>
<p>※利用方法を記入。</p> <p>学部長が教員全員の「学生による授業改善アンケート」に目を通し、問題のある教員には面談し、事情説明や改善を求めている。</p>	
<p>【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年度秋学期「学生による授業改善アンケート」学部別集計結果 	

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>2020 年の 3 月末に急遽オンライン授業に切り替える要請が出たものの、GIS では 4 月 21 日から全授業を開始し、計 12 週の授業を実施した。専任・兼任教員ともオンライン授業は初めてであったが、大学がオンライン授業を決定してからは、専任・兼任教員、および学生を対象に独自の Zoom Workshop を複数回開催し、教育内容を大きく変更せずに、シラバスに記載されている内容の授業を実施することができた。</p> <p>オンライン授業であっても、GIS の教育の特色であるアクティブラーニングを維持できたことは特記に値する。春学期の初めの数週間は、学生のインターネットの設備状況を考慮しオンデマンド授業を展開したものの、5 月からは Zoom でのライブ双方向型授業を多くの科目で実施し、Breakout room の機能を利用するなどして、学生同士のディスカッションやグループワークを取り入れることができた。</p> <p>慣れないオンライン授業でもアクティブラーニングが実施できたのには、いくつかの理由が考えられる。まず、GIS では普段から授業の内外で教員と学生のコミュニケーションが多いため、オンラインに切り替わってからも、各教員が学生の困りごとや要望を聞き出し、それらに柔軟に対応できたことが挙げられる。また、週 1 回のペースで執行部から専任・兼任教員へ情報発信をし、オンライン授業の方法やレクチャー動画の作成方法、出席の取り方、人数が超過した場合の選抜方法、成績評価の方法などについて学部としてのガイドラインを提示したことも、オンライン授業の成功をもたらしたと言える。さらに、執行部は兼任教員からの質問を随時 Google Form で受け付け、それに対する回答を FAQ という形で全教員に配信し情報共有したことや、これまで専任教員だけ</p>	<p>1.2④と 1.2⑥</p>

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>で行ってきたFD ワークショップを2020年度は兼任教員と合同で複数回開催したことも、GIS全体のオンライン授業の向上に貢献した。</p> <p>このように蓄積されたノウハウは秋学期が始まる前、そして2021年春学期が始まる前に新旧全教員に周知し、ハイフレックスという新たな授業形態にも対応できるようにした。</p>	
---	--

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>2020年春学期のはじめはオンライン授業の対応に追われ、学生の履修指導のための十分なサポートが行えなかった。質問や相談事がある学生には、学習支援委員によるオンライン・オフィスアワー、上級生の有志数名がZoomで相談を受け付けるVirtual Common Room, Google Formを用いた質問箱などを介してサポートを行ったが、それ以外の学生に対してはサポートができなかった。学生同士のつながりも弱かったため、互いに情報交換ができなかったことも問題であった。2021年度春学期には新入生へのサポートを強化するために、(1) Relay Program と(2) GIS Supporters 制度を開始した。Relay Program では1~4年生各3名ずつをグループに割り振り、学年を越えた交流(情報交換)を促した。GIS Supporters はラーニング・サポーター制度を利用し、新入生に対しGISでの授業や生活一般に関するアドバイスを行っている。また例年通り、専任教員による個別面談も入学式当日に対面で実施した。</p>	1. 2①

【この基準の大学評価】

<p>グローバル教養学部が創設以来掲げてきたきめの細かい少人数教育の成果が、オンライン授業下においても、実質100%の双方向アクティブラーニング授業の実施や、一年次修了時点での全学生の英語運用力の向上などに如実に現れている点を、非常に高く評価できる。</p> <p>また、高大連携に関する企画や、オープンキャンパスに連動する事前動画配信などを実施するとともに、キャリア支援にも独自に取り組み、いわゆる〈入り口と出口〉に関する配慮を積極的に行っていることは高く評価できるため、今後とも一層の充実に向かわれることを期待したい。</p> <p>学修成果の把握については、2020年度よりTOEFL_IPTの過去3カ年分のスコアデータを統合して分析し、英語運用能力の向上が可視的に確認されるようになったことが評価できる。今後も継続的な分析と確認をお願いしたい。</p> <p>授業外学習時間についての学生の認識の高さも、上記少人数教育の成果と言え、授業規模と教育効果の関係を認識するうえで、全学で共有するべきと思われる。</p> <p>高い教育レベルを維持せんとするがために生まれてしまう成績不振学生に対しても、委員会を組織して複数回の面談を行うなど、きめの細かい支援がなされている。一朝一夕に成果が現れるような課題ではないが、継続的な取り組みが期待される。また、授業定員の厳格性によって希望する授業を受けられない学生への配慮・対処にもさらに留意が望まれる。</p>	
---	--

2 教員・教員組織

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。			
①学部(学科)内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S A B		
<p>【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。</p> <p>【2020年度のFD活動の実績(開催日、場所、テーマ、内容(概要)、参加人数等)】※箇条書きで記入。</p> <p>専任・兼任教員を対象にしたFDワークショップを以下の通り開催した。全てZoomによるオンライン開催。</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>第1回FDワークショップ(4/21) Zoom Workshop</p> <p>第2回FDワークショップ(4/22) Zoom Workshop</p> <p>第3回FDワークショップ(4/23) Zoom Workshop</p> <p>第4回FDワークショップ(5/13) 専任教員13名が参加。オンライン授業に関する意見交換。</p> <p>第5回FDワークショップ(5/20) 専任教員4名、兼任教員15名参加。オンライン授業に関する意見交換。</p> </td> <td style="width: 50%; vertical-align: middle; text-align: center;"> <p>} 専任・兼任教員約30名が参加。Zoomの各種機能について。</p> </td> </tr> </table>		<p>第1回FDワークショップ(4/21) Zoom Workshop</p> <p>第2回FDワークショップ(4/22) Zoom Workshop</p> <p>第3回FDワークショップ(4/23) Zoom Workshop</p> <p>第4回FDワークショップ(5/13) 専任教員13名が参加。オンライン授業に関する意見交換。</p> <p>第5回FDワークショップ(5/20) 専任教員4名、兼任教員15名参加。オンライン授業に関する意見交換。</p>	<p>} 専任・兼任教員約30名が参加。Zoomの各種機能について。</p>
<p>第1回FDワークショップ(4/21) Zoom Workshop</p> <p>第2回FDワークショップ(4/22) Zoom Workshop</p> <p>第3回FDワークショップ(4/23) Zoom Workshop</p> <p>第4回FDワークショップ(5/13) 専任教員13名が参加。オンライン授業に関する意見交換。</p> <p>第5回FDワークショップ(5/20) 専任教員4名、兼任教員15名参加。オンライン授業に関する意見交換。</p>	<p>} 専任・兼任教員約30名が参加。Zoomの各種機能について。</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<p>第6回FDワークショップ(7/3)専任教員3名,兼任教員5名参加。オンライン授業に関する意見交換。 第7回FDワークショップ(7/8)専任教員13名が参加。教員と学生のアンケート調査の結果について。 第8回FDワークショップ(9/11)専任教員3名,兼任教員11名参加。 第9回FDワークショップ(9/14)専任教員2名,兼任教員4名参加。 第10回FDワークショップ(11/18)専任教員13名が参加。動画を用いたフィードバックについて。</p>	
<p>Zoom, Hoppii の使い方, オンライン授業について。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入</p> <p>オンライン授業に関しては兼任教員も初めてであるため,専任教員と合同でZoomにてFDワークショップを数回開催した。参加は任意であったが,積極的に参加する教員が多かった。他大学の試みについて紹介があったり,兼任教員ならではの困りごとなども話し合うことができ,参加者の満足度も高かった。また,参加できなかった教員に対しては,Zoomを録画しURLを配信した。直接参加できなかった教員からも,有用な情報を得られたという声が寄せられた。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> Minutes from the FD Workshop (5/13, 5/20, 6/10, 4/21) FDワークショップの報告(2020年第1回,第4回,第6回,第7回,第8回,第10回教授会議事録) FD Workshop Handout (11/18) 	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入</p> <p>研究活動の活性化を図るため,執行部が若手の専任教員と意見交換を行った(Research Support Forum, 2021年2月3日)。学部として研究活動を活性化させるのに必要なサポートについて話し合い,いくつかの方策を決定した。具体的には2021年度に以下を開催する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 年に数回,リサーチ・フォーラムを開催し,研究に関する相談ができる場を設ける。科研費申請に関する相談をしたり,他分野の研究者にも分かりやすく研究内容を説明するための練習の場とする。 PR委員会と連携し,リサーチ・シンポジウムを開催し,学部内教員の研究成果を学部内外に発信する機会を作る。 春や夏の授業のない期間において「リサーチ週間」を設けたり,学期中でも「リサーチ時間」を設ける。その週間(時間帯)は急な業務やメールの返信などができないことを,事前に学部内で共有する。 研究開発センターと連携しながら外国人教員ならではの研究資金の獲得方法について,情報を提供する。 	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入</p> <p>これまで研究活動に関しては,各教員の「やる気」にのみ依存していたが,学部としてのサポート体制を整え,若手教員の研究の活性化のための方策を決定した。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> 2020年度第13回教授会議事録,資料C-6 	
③組織編制やFD等に関して,COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は,その内容を教えてください。	
<p>※取り組みの概要を記入</p> <p>上記2.1④に記載したFDワークショップはどれもCOVID-19への対応として開催されたものである。</p> <p>上記以外にも,執行部からGIS教員に対して,春学期は週1回のペースでオンライン授業の方法やレクチャー動画の作成方法,出席の取り方,人数が超過した場合の選抜方法,成績評価の方法などについて情報発信を行った。また,これまでは専任教員を新任の兼任教員の担当者(コーディネータ)として割り当て,授業運営や成績評価などの相談を受け付けていたが,2020年度はオンライン授業が導入され,古参の教員であっても授業運営に戸惑いが多かったことから,兼任教員全員に対して専任教員のコーディネータを割り当てた。各専任教員は7~8人ほどの兼任教員を担当している。コーディネータ制度により,兼任教員は質問や相談がしやすくなり,専任教員が対応することで問題が生じたときにすぐに執行部まで情報が届くようになった。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入</p> <ul style="list-style-type: none"> コーディネーター一覧表 Letters to GIS Instructors 	

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ,取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお,現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は,今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
----	---------

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し,回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した,A:従来通り,B:改善していない」を意味する。

・GISの教員組織の特色は、兼任教員との連携がよくとれている点である。兼任教員に質の高い授業をしていただくためにも、GISコミュニティの一員として細やかなサポートを行っている。コーディネータ制度により、気軽かつ頻繁に情報交換ができる体制を作り、執行部からの一方的な情報の伝達だけでなく、兼任教員からの声が執行部に届くようにしている。このことにより、授業内での学生の様子などの情報も把握することができ、授業の質保証にもつながっている。	2.1①と2.1③
--	-----------

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・研究活動の活性化を目指して方策を決定したが、少人数学部であることから、委員会などの学務も多く、研究活動のための時間がなかなか取れない現状がある。学務に関しては、全学委員だけでも各教員平均で5.8あり、これに学部内委員が加わる。研究活動の活性化には研究時間の確保が重要な課題であり、引き続き対策を検討する必要がある。	2.1②

【この基準の大学評価】

<p>グローバル教養学部は、まず、2020年度急遽オンライン授業に切り替わったことを受けて、4月の下旬という比較的早い段階で専任・兼任ともに複数回にわたってZoom workshopを開催したことを始め、その後もオンライン授業に関する意見交換、アンケート結果の共有などFDワークショップを積極的に開催し、学部全体でオンライン授業の運営と留意点などについて情報を分かち合い、困難な状況乗り越えるべく尽力した点は、高く評価できる。</p> <p>次に、特に若手教員の研究活動を支援するための体制を整え、2021年度内にフォーラムやシンポジウムを通して研究活動を推進させる具体的な施策も掲げられており、その成果を期待するとともに、進捗を注視したい。また、兼任教員一人一人に対しても、質の高い授業展開を支援するために専任教員がコーディネーターとしてサポートする体制を作っている。これらも、特筆すべき試みとして高く評価できる。</p> <p>一方で少人数学部が必然的に負わねばならない教員個々の過重負担については、大学全体で考えるべき問題であり、負担の公平性の観点から改善が求められる。</p>
--

3 その他の基準のCOVID-19への対応

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 その他、学生支援や学生の学習環境や教員の教育環境整備、社会貢献におけるCOVID-19対応・対策を行っているか。
①その他、学部として学生支援や学生の学習環境や教員の教育研究の環境整備、社会貢献等におけるCOVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。
<p>※取り組みの概要を記入</p> <p>学生同士の交流の機会を設けるための取り組みを以下の通り行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一年生のためのミニ・オリエンテーション(6/27)。対面での予定であったが、直前に感染拡大の情報を受け、Zoomに切り替えた。約25名の一年生が参加した。新学期に行くはずのオリエンテーションを行った他、学生同士が自己紹介をし、ゲームなどを通して交流する機会を設けた。 ・秋学期入学生との交流会(9/12)。秋学期入学式とオリエンテーションの後に、在学生数名の有志を募り、Zoomで自己紹介やゲームなどを行い、交流の機会を設けた。 ・Summer Talk Program/Spring Talk Program(8/24~9/13と3/8~26)。長期休暇期間に実家に帰れない学生がいることを鑑み、Zoomにて英語で様々なトピックについて自由に議論できる場を設けた。夏休み中は専任教員によるセッション10回と卒業生によるセッション4回を開催した。春学期は専任教員によるセッション9回と、学生によるセッション3回を開催した。参加者は0~13人ほどではあったが、参加者の満足度は高かった。 ・新二年生のためのミニ歓迎会(3/30)。新学期が始まる前に、新二年生がキャンパスにて対面で他の学生と交流する機会を設けた。新2年生20名、上級生10名、専任教員8名が参加し、ゼミの履修方法やセクションなどの相談に乗った。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・Relay Program (4/5)。学年を越えた学生同士の連携を強めるため、2021年4月に新規導入した。各学年3名ずつを一つのチームとし、各チームがZoomにて情報交換を行った。秋学期にも新入生を新たに加えて開催をし、以後は学生のみで自走できるようにしている。

【根拠資料】

・Hoppii での案内文

【この基準の大学評価】

グローバル教養学部では、学生同士の交流の機会を設けるため、Zoomを駆使してさまざまな取り組みを行った点を高く評価できる。春・秋の新入生オリエンテーション終了後に、自己紹介やゲームを行う、Summer/Spring Talk Programで専任教員・在学生・卒業生によるセッションをそれぞれ10数回開催する、Relay Programによって学年を超えた学生同士の連携を促進するといった形で、対面不可能な状況下でのコミュニケーション不足をできる限り解消することに努めたと言える。また、新二年生のためには、春学期開始前に専任教員や上級生を含めた対面での交流機会を作り、ゼミ履修やセレクションについての相談に応じるなど、前年度殆ど来校できなかったことからくる学生の不安にも対処している。このように、学生支援・学習指導の両面において、COVID-19への対応は適切に行われたと考えられる。

III 2020年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	学部入学定員の大幅増により生じた現行カリキュラム上の問題点を解消し、学部の理念である国際基準の教育に相応しい新カリキュラムを策定・施行する。	
	年度目標	本年度にスタートさせた新カリキュラムの適切かつ円滑な運用を図る。	
	達成指標	新カリキュラムにおける履修状況を確認する。一年生が受講する科目の担当教員や学生モニターから新カリキュラムに対する現場の声を拾う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	新カリキュラムは円滑にスタートし、履修状況も良好であることが確認できた。学生モニター制度や学生および教員との個別面談などを通し、新カリキュラムのフィードバックを得ることができた。また教員と学生にアンケートを実施し、オンライン授業においても十分な学習成果が得られているという情報を得た。コロナ禍という制約の中では十分に目標を達成したものの、対面での履修状況等はまた異なると考えられるため、引き続きモニタリングが必要である。
		改善策	オンライン・対面・ハイフレックスといった形態によって履修状況や学習効果が異なる可能性があるため、カリキュラム上の問題点と学習形態・環境の問題点をそれぞれ把握する。必修英語科目であるReading Skills I から II に向けて難易度が急に上がるという声が複数の学生からあったため、次年度に向けて難易度の調整を行う
質保証委員会による点検・評価			
所見	コロナ禍という未曾有の状況にも関わらず、新カリキュラムが順調に運営されていることが、教員・学生双方のアンケート結果からも裏付けられた。さらに、新旧の課程別にオリエンテーションを用意したこともあり、カリキュラムの並存による混乱は報告されていない。Reading Skills II の難易度に関して、教員全員が問題を共有し、迅速な対応が検討されたことは評価できる。		
改善のための提言	2022年度中には、新旧カリキュラムの履修者がほぼ半数ずつとなる。また、新入生より教職課程も廃止される。カリキュラムの違いにより履修上の不利益が生じないよう案内の継続が必要である。なお、ハイフレックス型の授業が行われる場合には、教室設備・機材の問題と相まって、教員への負荷が非常に大きい。兼任講師へのサポートも心掛けてほしい。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	①「グローバル社会の諸問題の解決に資する人材の育成」という当学部の理念達成に向けて、より専門性の高い学際的知識を滋養する教育方法を導入する。 ② 履修希望者の特定科目への集中と入学時における英語力の差の拡大に対して、有効な対	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		策を検討する。
	年度目標	①少人数双方向型教育を新カリキュラムの全ての科目において実施する。 ②-1 履修希望者数の多い科目を洗い出し、少人数教育維持のため、公正なセクションができるよう対策を取る。 ②-2 入学時に英語力が低めな学生に対して、選択英語スキル科目の履修を促し、英語力の底上げを行う。
	達成指標	①少人数双方向型教育を実施している科目数を把握する。 ②-1 科目ごとの履修希望者数と最終受講者数、セクション方法について把握し、教員と情報共有する。 ②-2 必修英語スキル科目の担当教員と連絡を取り合い、英語力が低めの学生には選択科目の履修指導を行う。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	①オンライン授業における「双方向型授業」の定義が通常の対面授業のものと異なること、また、春学期にはシラバス内容の変更を余儀なくされたことから、少人数双方向型授業の科目数の把握には至らなかった。しかし、学生・教員に対するアンケートからはほとんどの科目で双方向型授業が展開されたことが明らかになった。 ②-1 セクション方法について授業開始前に教員間で情報を共有した。また、セクションが行われた科目と最終受講者数がオンラインでわかるようなシステムを導入した。 ②-2 特定の学生に対する選択科目の履修指導は行えなかった。
	改善策	①双方向型授業の方法が多様化していることを受け、具体的にどのような双方向型授業がどのくらい行われているのかの把握に努める。 ②-1 セクション方法の透明性を引き続き高めると共に、セクションのない科目の履修を促す方法を検討する。 ②-2 学期の早い時期に英語力が低めの学生を特定し、履修相談に来るよう促す。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	① 学部主催科目については、事実上すべてが「双方向型授業」として行われていることが確認された。 ②-1 セクション結果と追加募集の有無が学部のオンライン掲示板で一覧表示できるようになった。長年の課題であったセクションの円滑化を進める上で、学生にも益するところが大きい策である。 ②-2 英語力の低い学生の把握と指導が十分とは言えなかったが、これには入学時に対面による能力試験 (TOEFL-ITP) を実施できなかった事情も勘案すべきであろう。
	改善のための提言	②-2 TOEFL-ITP により英語力が十分でない学生を入学時に同定し、可能な限り個別に履修指導を行うことが望まれる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	①大幅な入学定員増の下で、4年間の学習成果を適切に測る評価指標を検討する。 ②学部の理念を反映した教育成果の可視化を強化する。
	年度目標	①アセスメント・ポリシーに則った成績評価や単位付与を徹底する。 ②学部パンフレット、ウェブサイト、SNS等で引き続き教育成果を公表し、これらの認知度を高める。
	達成指標	①アセスメント・ポリシーを兼任教員に周知し、シラバスに反映されているかを確認する。 ②教育成果の認知度について把握する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価 自己評価 A 理由 ①シラバス依頼時に兼任教員にアセスメント・ポリシーについて周知し、シラバスへの反映をお願いした。 ②学部パンフレットやウェブサイトに教育成果を公表したが、認知度の把握はまだできていない。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

		改善策	①現状維持。 ②教育成果の認知度を把握するためのアンケートを実施する。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	① 年度目標達成。 ② 教育成果の可視化への努力は評価できるが、公表内容が一般に認知されるまでに時間差がある点も考慮されたい。
		改善のための提言	② 学部パンフレットやウェブサイトでの記載に加え、成長著しい YouTube など動画メディアの活用も考えられよう。
No		評価基準	学生の受け入れ
4		中期目標	①中等教育のグローバル化を踏まえて、多様な教育歴を考慮した入試方法を常に検討する。 ②学部に対応しい英語能力試験とそのスコアを検証する。
		年度目標	①各入試経路の入学者数の安定を図る。 ②各入試経路における入学者の英語力と入学後の適正について検討する。
		達成指標	①各入試経路の入学実績を把握する。 ②ここ数年の学生の入学時の英語能力試験のスコアと入学後の GPA との関連について分析する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	①各入試経路の入学実績を把握した。 ②入学時の英語スコアと GPA の関連についての分析を行い、結果を元に教授会で議論を行った。
		改善策	①現状維持。 ②引き続き、入学時の英語スコアと GPA のデータを蓄積し、入試経路・英語力・入学後の GPA の分析結果からアドミッションポリシーに沿った学生の受け入れができてきているか確認する。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	① 年度目標達成。 ② 入試経路と英語力・入学後 GPA との相関は、カリキュラム改革にも直結する重要情報であり、それに基づく教授会での議論は非常に有意義であった。
		改善のための提言	② 左記データの収集・分析を経年的に行い、対応する入試改革を迅速に進める必要がある。
No		評価基準	教員・教員組織
5		中期目標	①学部教員の年齢構成や教育分野の多様性、英語による教育・実務能力に最大限配慮しつつ、専任採用人事を続ける。 ②世界基準の教育を提供するとの学部理念から、研究業績と英語力を重視した兼任講師の採用を行う。
		年度目標	①2019年の人事で採用に至らなかった2名の助教枠について専任教員の採用人事を継続する。 ②研究業績と英語力を兼ね備えた兼任講師の採用を継続する。
		達成指標	①専任教員の募集と審査を行う。 ②新カリキュラムにおける新規科目の担当教員を決定する。
		教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	①2名の専任教員の採用が決定した。 ②新カリキュラムに必要な新規科目の担当教員は決定したが、未だ適任者が見つからない科目がある。
		改善策	①助教枠にまだ空きがあるため、次年度も早期から専任教員の募集と審査を行う。 ②新規科目の担当者の募集を行う。
		質保証委員会による点検・評価	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		所見	① 学部理念に相応しく、研究業績にも優れた准教授2名を採用。助教枠に該当者がなかったのは、コロナ禍による応募者の減少も一因であろう。 ② 新規科目担当の兼任講師採用は、一部を除き順調に進んでいる。	
		改善のための提言	① 国際公募による助教人事を継続する。 ② 休講中の科目の担当者募集を積極的に行う。	
No		評価基準	学生支援	
6		中期目標	成績不良者や英語力の低い学生に対して、学部全体で支援と指導を行う。	
		年度目標	修得単位数及び累積 GPA が低い学生への個別面談を継続する。また、学習面以外の支援が必要な学生を他の専門部署（学生相談室・学生障がい支援室）と繋げられるようリーチアウトする。	
		達成指標	「個別面談」の実施回数を把握する。教員同士での情報共有の場を設け、支援が必要な学生にリーチアウトできるような仕組みを検討する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	学期のはじめに個別面談の機会を増やし、毎週決まった時間にアポなしで学習支援委員の相談を受けられるようにした。また成績不良者に対しても個別面談を行い、教授会で情報を共有した。個別面談は8名に対し行った。	
		改善策	専任教員による個別相談だけでなく、ピアサポートシステムを導入し、学生を多方面からサポートできるような体制を作る。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	成績不振者への親身なアドバイスと支援は、十分過ぎる程の充実度と言えよう。	
		改善のための提言	学生が抱える成績以外の問題について、学生障がい支援室等との連携をさらに深める必要がある。	
No		評価基準	社会連携・社会貢献	
7		中期目標	学部の理念と特色を生かした社会貢献・社会連携を推進する。	
		年度目標	専任・兼任教員と在学生在が共に参加できる研究会等を企画し実現する。	
		達成指標	研究会・ワークショップなどの開催。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	学生と教員が任意のトピックでディスカッションをする Summer Talk Program と Spring Talk Program を実施し、在学生・卒業生・教員が参加した。	
		改善策	誰もが気軽に参加できる Talk Program を継続するとともに、教員の研究発表を中心とした研究会を実施する。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	夏季休暇（8-9月）と春季休暇（3月）中の Talk Program は、とりわけコロナ下において、学生と教員、さらには卒業生との連携強化を図る意欲的な企画であった。	
		改善のための提言	今後の試みとして、他学部・他大学の研究者や企業実務者との連携ワークショップも考えられよう。	
【重点目標】				
新カリキュラムを充実させ、また学部の公務をより円滑に進めるために、2019年度に採用に至らなかった助教枠2名の採用人事を行う。学部の理念に理解があり、研究業績・教育歴・語学力（日本語と英語）を兼ね備えた人材を国際公募にて募る。				
【目標を達成するための施策等】				
一度の公募で適任者が見つけられない可能性があることを考慮して、夏までに一回公募をし、場合によっては秋にももう一度公募を行う。				
【年度目標達成状況総括】				
本年度の重点目標である専任教員2名の採用は十分に達成できた。春学期早々に人事委員会を立ち上げ、教授会でも活発な議論を行うことで、研究業績・教育歴・語学力全てを備えた2名を秋までに決定することができ、余裕をもって2021年度のカリキュラムや学部の運営体制の準備ができた。また、コロナ禍で学生の学習への不安も高まっていたことから、学				

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

生支援に力を入れ、目標以上のサポートができた。目標達成にやや至らなかった項目が一部あるが、すでに目標に向けた取り組みに着手しているものばかりであるため、次年度はその成果を確認していく予定である。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

グローバル教養学部は、重点目標に掲げられた新規採用人事が円滑に行われたことは高く評価できる。空いている助教枠の採用、また未定である新カリキュラムにおける新規科目の担当者の採用についても、特に後者に関しては早急に適任者を選定することが望まれる。

また、コロナ禍という非常事態にあつて、新カリキュラムが円滑にスタートできたことは非常に高く評価できる。これをより万全なものにするために、授業形態の多様化に即した新カリキュラムの有効性についての検証を継続して行うことが望まれる。

セレクションの円滑化・透明化が達成されたことについては評価できるが、同時にセレクションに漏れた学生のフォロー体制の強化も必要であると思われる。

教育成果の認知度の把握に関しては、今後の貴学部の社会的評価を高めるためにも、ぜひ注力していただきたい。

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	学部入学定員の大幅増により生じた現行カリキュラム上の問題点を解消し、学部の理念である国際基準の教育に相応しい新カリキュラムを策定・施行する。
	年度目標	①新カリキュラム対象の学生の履修動向、単位取得状況、科目に対する満足度を調べ、新カリキュラムの適切な運用を図る。 ②リベラルアーツ教育と学際教育のあり方について教授会で議論し、学部の教育理念と現カリキュラムの整合性について確認する。
	達成指標	①2021 年度の 1, 2 年生の履修単位、GPA、満足度など。 ②GIS の教員・学生におけるリベラルアーツ教育と学際教育の理解度。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	①「グローバル社会の諸問題の解決に資する人材の育成」という当学部の理念達成に向けて、より専門性の高い学際的知識を滋養する教育方法を導入する。 ②履修希望者の特定科目への集中と入学時における英語力の差の拡大に対して、有効な対策を検討する。
	年度目標	①双方向型授業の方法が多様化していることを受け、具体的にどのような双方向型授業が行われているのか把握する。 ②セレクション方法の透明性を高めると共に、セレクションのない科目の履修を促す方法を検討する。
	達成指標	①2021 年度の双方向型授業の実施状況（専任・兼任教員を対象にした FD 懇談会にて尋ねる）。 ②2021 年度の各科目のセレクション実施状況および最終的な履修者数。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	①大幅な入学定員増の下で、4 年間の学習成果を適切に測る評価指標を検討する。 ②学部の理念を反映した教育成果の可視化を強化する。
	年度目標	①オンライン・対面・ハイフレックスといった形態によって履修状況や学習効果がどのように異なるのかを把握し、それぞれの長所を活かした授業運営を検討する。 ②教育成果を学部パンフレットやウェブサイトで公表し、その認知度を把握する。
	達成指標	①「学生による授業評価アンケート」による授業形態に関する 2021 年度のデータと履修者数や授業満足度。 ②2021 年度の教育成果の認知度の調査データ。ウェブサイト等の閲覧率。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	①中等教育のグローバル化を踏まえて、多様な教育歴を考慮した入試方法を常に検討する。 ②学部に対応しい英語能力試験とそのスコアを検証する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度目標	①一般入試（A方式）が今年度から変更となるので、志願者・合格者・入学者の特徴について分析する。 ②入学時の英語スコアとGPAのデータを蓄積し、入試経路・英語力・入学後のGPAの分析結果からアドミッションポリシーに沿った学生の受け入れができていくか確認する。
	達成指標	①2022年度のA入試の志願者数・合格者数・入学者数、および英語外部試験のスコア。 ②2021年度入学生の入学時と入学一年後の英語スコア、GPA、入試経路のデータ。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	①学部教員の年齢構成や教育分野の多様性、英語による教育・実務能力に最大限配慮しつつ、専任採用人事を続ける。 ②世界基準の教育を提供するとの学部理念から、研究業績と英語力を重視した兼任講師の採用を行う。
	年度目標	①専任教員（助教）の採用に向け、早期から専任教員の募集と審査を行う。 ②新規科目・休講科目の担当者の募集を行う。
	達成指標	①2021年度の人事手続きの進捗状況。 ②2021年度の新規科目・休講中科目の担当者の募集・採用状況。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	成績不良者や英語力の低い学生に対して、学部全体で支援と指導を行う。
	年度目標	専任教員による個別相談だけでなく、ピアサポートシステムを導入し、学生を多方面からサポートする体制を作る。
	達成指標	2021年度の学習支援委員の面談の実施状況およびピアサポートシステム（GIS Supporters, Relay Program）の実施状況。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
7	中期目標	学部の理念と特色を生かした社会貢献・社会連携を推進する。
	年度目標	誰もが気軽に参加できるTalk Programを継続するとともに、教員の研究発表を中心とした研究会や企業実務者との連携ワークショップを実施する。
	達成指標	2021年度のTalk Program, 研究会, 企業実務者との連携ワークショップなどの実施回数, 参加者数。
<p>【重点目標】 オンライン・対面・ハイフレックスなど多様な授業形態のそれぞれの長所・短所を整理し、学習成果を高めるのに適した双方向型授業のあり方を検討する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 専任・兼任教員を対象にFDワークショップを開催し、各授業形態における双方向型授業のあり方について意見交換をする。学生による授業改善アンケートのデータを分析し、授業形態と学習効果、授業満足度との関連を調べる。教員・学生双方からのフィードバックをもとに、多様な授業形態を柔軟に組み合わせることも視座に入れたWithコロナ時代の双方向型授業のあり方について教授会で議論する。</p>		

【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

グローバル教養学部は、中期目標・年度目標、達成指標ともにおおよそ適切なものと思われる。質保証委員会からの提言も適切かつ具体的なものであり、これに沿って改善のために注力していただきたい。

リベラルアーツ教育と学際教育の在り方・関係性、「グローバル教養」の中での「専門性」の位置づけについて、学部内での検討の成果を広く発信し、周知に努めることが期待される。

A方式の入試形態の変更に伴う受験生・入学者の変化についての分析は、今後の学生募集・学生の質などに大いに関わることなので、是非とも綿密に行っていただきたい。

成績不振学生に対する支援としてのピアサポートシステムについては、大いに期待したい。

FDワークショップの開催や教員相互・学生相互の情報交換・共有を引き続き積極的に行っていただき、双方向授業の理想的な形態を追求するとともに、ウィズコロナ以後にもその知見を活かして柔軟な授業展開が可能になることを期待する。

【大学評価総評】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

グローバル教養学部は、少人数教育の利点を最大限に生かし、高い教育成果をあげていると言える。教員と学生のディスカッション、学生同士のグループワークなど、アクティブラーニング型の授業を通じて、学生の英語運用能力・思考力・表現力などを向上させていることが伺える。これはひとえに、兼任も含む教員間・学生間・教員学生間のいずれにおいても、距離の近いアットホームなコミュニケーションによって信頼感が醸成されている結果であると思われる。

このことは、COVID-19 への対応にも顕著に見られ、コロナ禍という困難な状況の中でも例年とほとんど変わらない教育・学習成果を上げ得たのもその証左となろう。

一方で、多様なバックグラウンドを持つ学生の中には、学習困難な成績不振学生も存在することが推測され、小人数ならではの教育上の困難もあろう。こうした学生へのより綿密な支援が必要と思われる。学習支援委員とピアサポーターの連携に大いに期待したい。

また、教員組織も少人数であることから、大規模学部に比べて、負担の公平性という面で問題があることも事実である。これについては、理事会を始め大学全体で改善していく問題であると言えよう。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。